株式会社マグエックス

社員が知財を「ジブンゴト化」し仕事に組み込んで商品開発を行う

押出成形機による高品質のマグネットシートを開発・製造・販売。
材料の配合も、生産する機械もすべてオリジナルであり、
さまざまなアイデアによって、その用途は無限に広がっている。
また、多くの工業部品も生み出し、多岐にわたって産業をサポート。
「世の中にないものを作ろう」という気概に満ちた
創造力とチャレンジ精神のある企業である。

主な権利

2018年：意匠登録 第1595879号
2018年：商標登録 第6062531号
2019年：商標登録 第6123270号
2020年：特　許　第6780883号
2021年：特　許　第6830247号

会社概要

所在地：東京都中央区日本橋本石町3-3-10 ダイワビル6・8F
電　話：03-6695-6685
ＵＲＬ：https://www.magx.co.jp
業　種：プラスチック・マグネットなどの製造及び販売
設　立：1965年（昭和40年）　資本金：8,710万円

代表取締役社長：阿部 真也さん（左）
取締役 管理部 部長：村上 予さん（右）

「柔らかい発想」を大切にする「柔らかい磁石」の先駆企業

磁石は、硬いものだ。そんな常識を覆して、磁石の粉にプラスチックの樹脂を混ぜ合わせることによって柔らかい磁石を開発したパイオニア企業が、株式会社マグエックスだ。今では誰もがさまざまなシーンで目にしているマグネットシートであるが、車の初心者マークもその一つだと言うと、さらに身近に感じられるかもしれない。

「私たちは、人が使う便利なものを作るために人が集まっている、人中心の会社だと思っています。最終的にはお客様に喜んでいただけるものを生み出していきたい。それが創業からの想いです」と阿部社長は語る。

知財センターを初めて活用したのは4年ほど前で、アメリカの商標の件で相談に訪れ無事に解決できた。その後も継続的に相談をしながら3年間のニッチトップ育成支援も受け、会社全体で知財に関する知識の習得に努めた。

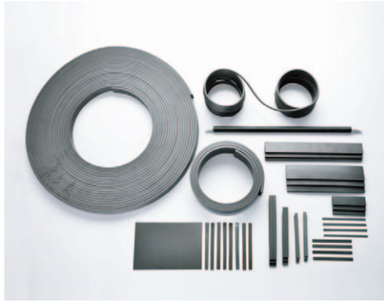
知財の一元的な管理のために社内体制をしっかり整備

「今後は特に商標をどんどん登録していきたいので、そのためには自分たちで出願できるようにしたいと考えていました。また、商品のネーミングをどのようにしたらよいか、他社の情報検索をどう行うべきかなど、社員みんなで勉強していく必要があると感じていました。今までは知財に関して特許事務所に任せっきりという面があり、特許の出願も工場や企画部門から直接依頼していました。これをもっと一元的に管理したいと感じ、管理部を知財担当にして体制を整えました」と阿部社長。現在、知財に関しては、管理部の部長でもある村上取締役と企画商品開発課のマネージャーが中心となって取り組んでいる。

いつでも相談できるという「安心感」があることの大切さ

ニッチトップ育成支援には多くの社員が参加し、特にセミナーは毎回20人以上が受講した。「予想以上の参加者でしたね。それだけ自分たちの仕事に知財の知識が必要だと感じていたのでしょう。また、部署に偏りがあるわけではなく、それぞれの部署での関心が高かったのもうれしいことでした。これによって知財への意識と扱う方法が両方ともレベルアップしたと感じます。それぞれの社員が知財を『ジブンゴト化』できるようになったのは大きいです」とうれしそうに語る阿部社長。村上取締役は「知財センターのアドバイザーとプログラムの内容をいろいろと相談しながら進めました。例えば、大事な商標の部分は2回セミナーを行ってもらい、2回目はより具体的な実践編にするなど、工夫してもらったのは良かったです。当社の事例を使って検索のしかたなどを教えてもらい、社員にはより分かりやすかったと思います」と語った。

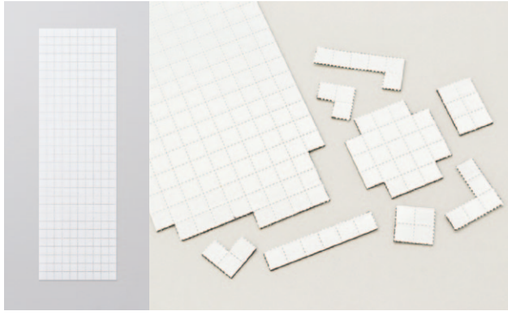
さらに阿部社長は「知財センターの支援を通して、社員みんなが『いつでも相談できる機関がある』と分かったことが、大きな安心感になったようです。また、社内の知財担当をしっかり定めたことも安心感につながりました」と語り、社員の声として「安心感」が多く挙げられていたとも語った。

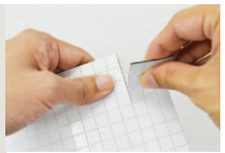


独自の押出磁場成形によって柔軟で高い磁気特性を実現したマグネット工業部品を実現。マイクロモーターやセンサー用途などに採用されている。

押出成形機による高品質のマグネットシート。薄くて柔軟性に優れ、初心者マークなどの車両用や、広告・看板、文具・事務用品、ノベルティなどに幅広く利用されている。

滑りやすいクリアホルダーや厚手の書類もしっかり保持する「マグネットハイブリッドクリップ」。





マグネット粘着付シート「ちぎれーる」。片面に粘着剤が付き、10mmごとにミシン目が入っているので、ハサミやカッターを使わなくても好みのサイズに手でちぎれる、新感覚のマグネットシートである。

知財への意識が高まることで仕事のプロセスが進化した

アドバイザーの支援もあり、商標を自力で出願することもできるようになった。支援期間中に13件もの商標出願を行ったことも大きな成果である。また、村上取締役は「単発のノベルティであっても、商品を出す時に何かに抵触していないか調査する件で、多くの相談が寄せられました。しっかりとしたプロセスを踏むべきだと社員が分かるようになり、事前に調べるという意識が根付いたのはうれしいですね」と語る。

これに続けて阿部社長は「今後はますますデジタル化も進むでしょうし、みんなが『ほしい』と思うものには、さまざまな新しい技術の要素が詰まっています。そうすると知財に関係してきますから、丁寧に見ていく必要があるでしょう」と語った。さらに「今では知財を加味した商品開発を行えるようになりました。特許に抵触していないかのチェックから始まり、形の面では意匠も考慮する必要がある。そして商品のネーミングも、今はいくつか候補を出した中で、商標を検索してチェックしています。そのように仕事の進め方が以前とはまったく違い、進化しています」と力を込めた。

「チャレンジ」しながら知財活用で開発の幅を広げる

常に新しいものに挑戦している企業であり、創業時から「チャレンジ」を大切にし、社員みんなに浸透している。コロナ禍においても企業として何かできないかと考え、加工業者と力を合わせて飛沫感染予防の対策グッズを生み出していった。フェイスシールドから始まり、ヘルメット用の透明マスクであるメットシールド、卓上アクリルパーテーション、さらにはそのクリーナーと、多くの人々を支える商品のリリースが続いた。「今の世の中に必要なものは何だろうと、常にみんなで議論しながら考えています」と阿部社長。自由闊達な社風は、それぞれが積極的に知財に取り組むパワーにもなった。

「これからは、知財を通して周りをよく見ることによって、アイデアが膨らむことがあると思います。知財が足かせになるのではなく、知財の活用によって商品開発の幅が広がるといいですね」と笑顔で語る阿部社長の瞳からは、明日へのチャレンジの想いが伝わってきた。

知財センターから

経営層も社員も熱心な取り組みで知財レベルが向上

知識の習得にとても積極的な会社で、セミナーには多くの社員が参加し、常に知財を意識して業務を行う取り組みができつつあります。そんな会社の雰囲気を作っているのは、経営層が知財に対して熱心であること。また、知財担当者は資格取得などにも積極的であり、社内の知財意識の向上にも努力されていると感じます。　担当：高崎アドバイザー

取材：2021年12月